神戸の冬を支える会にゅうすれたー．第12号

発行:神戸 : 神戸の冬を支える会

2000.9. ; 38cm

請求記号:震災-7-v302

[写真（8月3日、尼崎市は庄下川で火事の後かたづけに多数の市職員を動員した）あり　省略]

神戸の冬を支える会と……

　日本基督教団兵庫教区は、兵庫県下にあるプロテスタントキリスト教界の一員として自らも仲間の多くが阪神淡路大震災によって被害を受ける中、1995年の設立当初から神戸の冬を支える会に関わってきました。特にその時の担当が私だったのですが、震災に関する事には出来るだけ何でも関っていこうという教区の機運に押されて立ち上げ会に出て見て、他の仲間たちの熱意と機動力に圧倒されるばかりだったのを覚えています。兵庫教区は阪神間に半数以上の教会が集中していますが、なかなか個々の教会に取り組みが広がらないのを残念かつ申し訳なく思っています。私自身毎月の運営委員会に出るのが手一杯、精一杯の現状の中で、これからも何とか地元の拠点として教会が機能してくれることを願って、訴え続けて行こうと思っています。
　神戸の冬を支える会に関って、何よりも私自身がとても豊かにされました。それまで路上生活者と言えば自分とは無関係、違う次元の人たちとしか思わない貧しい感性でしたが、本当に問題なのは彼ら彼女らではなく、人間をまるで使い捨ての品物のようにあしらい、さんざん使い切った挙句に白い目で見下して放置し、何ら救いの手を差し伸べようとしない社会の問題であり、ひいてはその様な社会システムに乗っかって生きている私たち、自分自身の問題なのだと言うことが遅々たる学びの中でも分かってきたからです。自分の力ではどうしようもないところに追いやっておいて、その人たちを「努力が足りない、怠け者だ」等と言っているのが私たちだということが分かりました。
　私の方が余程怠け者だという反省もあって、今年度副代表を引き受ける事にしました。もっと多くの人が理解と支援をして下さり、本当の意味でもっと豊かになって下さることを心より願っています。

神戸の冬を支える会
副代表　佃　真人

一斉夜まわり

日本基督教団兵庫教区　被災者生活支援・長田センター　柴田　信也

昨年から始めた、神戸の冬を支える会による神戸市内の野宿者概数を調べる一斉夜まわりを、今年も7月7日（金）に行いました。当日は台風の影響もあって強風の吹く中、昨年を上まわる参加者がありました。

今年の「一斉夜まわり」を7月7日に行いました。この活動は、神戸市全域を調査対象区域とし、同一時間帯に夜まわりを行う、徹底した人海戦術です。そして、出会った人数、性別、年齢層、居住形態、居住場所などを調べます。奇しくもその日は七夕。定期的な夜まわり活動のないところでは、一年ぶりの再会といった場面もあったのではないでしょうか。昨年に引き続き、わたしは長田区地域を担当することになり、実際一年ぶりぐらいに少しゆっくりと話すことが出来た方がありました。

今回の活動で注目したいことの一つは、協力参加者の増加です。前回は81名でしたが、今回は123名が参加協力して下さいました。このことは、一つには神戸の冬を支える会の活動のすそのが拡がり、その活動に共感を抱き、また期待が寄せられていることの表れではないでしょうか。もう一つには、日常の夜まわりなどを通じて、野宿者が増加し続けている紳戸の状況が急迫しているという認識に一致していたこと。さらには、神戸市、行政サイドのおざなりな対応への怒りがわたしたちを結集させたのではないでしょうか。その結果、市内全区（9区）、31地域をまわることが出来ました。

これまでの地域情報や野宿者からの情報提供をもとに、あらかじめ野宿者の居られる場所を推測し、そこを中心にまわりました。しかし、人知れずの場所に居られる方たちを訪ねることは容易ではありませんし、どうしてもすべてを把握することなど出来ません。夜まわりのたびに感じることがあります。それは、まわっている以上は一人でも多くの方にお会いし、声をかけて、お話したいと思っているのです。しかしその一方で、野宿の状況を余儀なくされる方たちが一人でも増えている事実を突きつけられていることは、決して喜ぶべきことではないですし、拒みたい「現実」でもあるのです。一年ぶりの「一斉夜まわり」でしたが、今回もそんなやりきれなさを感じながら過ごした一夜でした。参加されたみなさん、本当にご苦労様でした。

総数		505名（499名）その他に荷物だけであったり、不在であったところが58ヶ所あった
	今年	東灘14名、灘27名、中央311名、兵庫89名、長田12名、須磨43名、垂水9名
	昨年	東灘8名、灘20名、中央350名、兵庫62名、長田15名、須磨31名、垂水3名
性別	今年	男性464名　女性13名　不明28名
	昨年	男性427名　女性14名　不明13名

年代別構成比	今年	20代 2名 （0.4%）	30代 15名 （3.4%）	40代 68名 （15.2%）	50代 236名 （52.9%）	60代 108名 （24.2%）	70代以上 17名 （3.8%）
	昨年	20代 4名 （0.9%）	30代 12名 （2.7%）	40代 59名 （13.5%）	50代 182名 （41.6%）	60代 150名 （34.2%）	70代以上 31名 （7.1%）

集計結果について（事務局）

昨年の結果と比べてみますと、数字的には横這い状態であると言えます。しかし、昨年の7月3日～今年7月6日までの間に、私たち神戸の冬を支える会の生活相談を通して、居宅を確保して、生活保護を受給したり、年金を受給したりして野宿生活から脱することのできた人の数は151人となっており、数字が横這い状態であることだけをとって、野宿者の数が止まっており状況が好転したとは到底言い難いのが現状です。また、全国的な傾向でありますが、都心部では野宿者の数が飽和状態となり、その周辺地域での野宿者の数が急激に増えている傾向にある事実があります。この神戸でも中心部から離れた、東灘区や須磨区・垂水区の集計結果がこのことを端的に表しているのではと推測されます。今年始めから活動を行っている尼崎でも増加の傾向にあり、その中でも関わりのもてていない地域へどうアプローチしていくかが課題となっています。これからは周辺地域（尼崎、西宮、芦屋、明石など）での調査の必要性も感じています。

また、昨年に比べ、60代以上の年齢層について減少したのは私たちが行っている生活相談においても、より野宿生活の負担が大きいと思われる高齢者層を中心に生活相談を受け付けるように行い、居宅確保に結びつけた一定の成果を表していると考えています。

参　：神戸の冬を支える会の生活相談（99年7月3日～00年7月6日）を通して居宅生活を始めた人
考　数
　151名（生活保護受給　137名、年金受給など　14名）
：神戸市による野宿者の概数調査

98年度	229人	99年度	335人
調査員	25人		51人

また、同じような都市規模の京都市が初めて、今年6月14日に職員105人を動員し行った調査について8月30日に公表しています。それによりますと、492名の野宿者を確認し、内18名が女性であったとのことです。神戸市も4回目となる調査をすでに8月23日に終了しており、その結果についても間もなくマスコミを通じて発表されることと思いますが、調査をしただけにとどまらず、どういった利用可能で有効な支援策を具体的に打ち出してくるのかが問われています。

この原稿を書いた後、神戸市による今年度の調査結果が公表されました。それによります

と、

調査日　8月23日（水）午後8時30分～午前0時

調査員数 79名

総数　　355名（内女性10名）昨年より、総数で20名増、女性は4名増

といったものでしたが、批判すべきは、発表資料の中で「今後の対応」として、「今回の調査を踏まえ、国や他都市の動向も視野に入れながら、住所不定者（ホームレス）の自立更生のため、個々の健康相談・生活相談・職業相談に努めていく。」としていますが、この文言は昨年の調査結果を公表したときと全く同じ文言であり、この1年間、神戸市として、何の取り組みもしてこなかったことを自ら認めるものであります。予想していたように、アリバイ的に調査をしたことだけをただ明らかにしたものです。既存の機能していない施策を押しつけようとする神戸市の姿勢を厳しく糾弾していく必要を感じています。（事務局）

権利としての生活保護

青木しげゆき

9月2日に、神戸の冬を支える会として、寺久保光良氏（高知県立大学福祉学部講師）を招いて「権利としての生活保護」と題した初めての講演会を開きました。

昨年の1月以降、生活相談をより充実、強化し、生活保護を受給して野宿から脱するという取り組みを行い、ある程度の成果を上げることができてきています。もちろん生活保護を受給して、野宿から脱したとは言っても、そのことだけで問題のすべてが解決したことにはならないことは言うまでもありません。

今回、このような講演会を開催した理由の一つとして、家はあるものの失業や地震によって生活が追い込まれ、野宿に至る前に使える施策の一つとして生活保護の制度があり、それを利用して、その人らしい生活を取り戻すことができるのではと考えたからです。

講演の中で、生活保護は、憲法25条の生存権保障を具現化する法律であるにもかかわらず、福祉事務所における対応については疑問符をつけざるを得ないような不適切な対応が、行政慣習として行われていること（中には、水道局などとも連携して給水停止をする前に福祉事務所に連絡をしているような自治体もあったりする）が全国的にあったりしているけれども、それに負けないで、裁判や不服審査請求などで闘っている人が多くいること、厚生省の方でも今までのやり方が間違っていたことに気づいてきたことなど、私たちを勇気づけるようなお話もありました。と同時に、憲法12条や97条にあるように、私たち白身が憲法で保障された権利を努力し、保持していくことの重要性については、ついつい忘れてしまっていたことに改めて気づくことができました。

また、会場の中からは、こういった生活保護の問題に関して、相談できるような所がないことや尼崎や西宮から来られた方々からの相談も寄せられました。神戸の冬を支える会としても今後の取り組みの中で、野宿を強いられている人たちだけではなく、家はあっても追いつめられ苦しい生活を強いられている人たちとも、一緒に闘っていく必要があることを実感した講演会でした。

『尼崎』、市としての施策がないままに

日本バプテスト連盟震災現地支援員会　森山　一弘

昨年12月末に阪神尼崎駅前の中央公園で強行された市公園課による強制追い立てを契機に、今年1月23日からはじめられた毎週日曜日夕方の炊き出し活動は月の第5日曜日を除いて現在も続いています。9月までは尼崎にある3つのカトリック教会と支える会事務局が中心になり炊き出し（冬場はカップラーメン、夏場はおにぎりやパック寿司など）を行ってきました。この10月以降、またやがて冬が来ることを踏まえ、何ができるかとらえ直さなければならない時期を迎えています。

週1回の炊き出しに集まる野宿者の数も当初60－70人だったのが、今では120－140人。尼崎市の行政発表では尼崎市内の野宿者数は160人となっていますが、阪神尼崎一出屋敷周辺だけですでに140人ですから、尼崎市全域における野宿の増加について行政サイドの認識の甘さを感じます。また、神戸市内の野宿者数が支える会調べで99年が499人・00年が505人で微増ですから、推測できることは野宿できるような場所が神戸市内で（あるいは大阪市内で）はほぼ満杯になり、尼崎市を含む阪神間で野宿者が急増している傾向があるということです。尼崎市発表の160人という数をとってみても、神戸市のような政令指定都市以外では実に第1位の野宿者の数なのです。

そのような中、昨年12月に引き続いて、6月26日祇園橋緑地公園で、8月3日阪神尼崎駅近くの庄下川東岸で市公園課や道路管理課による強制撤去と撤去にかこつけた強制追い立てがありました。いずれも支える会から人権無視と生存権の侵害ということで尼崎市長に対し抗議と申し入れをしていますが、まだ返答は返ってきていません。尼崎市として野宿者への何の福祉施策もないままでの撤去や追い立ては人のいのちを脅かすだけでなく、野宿者激増のための何の根本的な解決にはならないばかりか、むしろ余計な予算を費やすだけです。野宿者に対する尼崎市の対応に怒りを感じます。しかし、ぼつぼつですが、入院した人については居宅の生活保護になるケースも出てきています。神戸と同様に、尼崎でも息の長い（しぶとい）関わりが求められているということだと思います。

こらむ

のじれん全国行脚

東京の渋谷から「野宿者の生活と居住権を勝ち取る自由連合」（のじれん）の呼びかけで、7月21日からの沖縄サミットで各国の政府や報道関係者に、日本にも野宿生活者が大勢いることをアピールするため、東京から沖縄へ行脚した仲間と交流しました。7月10日に尼崎、11日～13日まで神戸に滞在、一緒に夜まわりをし、木曜の交流の日の炊き出しに参加・交流しました。東京から仲間がきて交流する事は初めてでしたが、全国各地で野宿している仲間がいること、また神戸の状況を東京の仲間に知ってもらう機会となったのでは、と思います。　事務局

＊仲間の声＊

神戸の冬を支える会では、毎用第4土曜日に「仲間の集い」を開いています。野宿している仲間が仲間として自らを取り巻く課題や問題について話しあったりしています。

「今、どんなことを一番問題に感じているか」
今野宿をしている仲間が、今後の生活をとのようにしていきたいと考え、何を必要としているのか……。炊き出しや生活相談などの関わりを通して何となく分かっているようで実は分かっていなかった面を分かち合っていきたい、そして今後の活動に生かしていきたい、ということから5月の「仲間の集い」では上記のようなテーマで話し合いを行いました。以下は当日の参加者から出た意見のうちのいくつかです。これをもとに今後も継続して、こうした話し合いの場を仲間の集いで続けていきたいと考えています。

【神戸市・更生について】
・更生施設は高齢者など大変（施設を使いやすくしてほしい）。
・生活保護を受けやすくしてほしい。
・更生の食事について（パンだけではしんどい。足りないときがある。）。
・更生の風呂は申し込んで1週間後になる。
・仕事の張り出しも更生ではめったにない。
・神戸市を動かすのには一般の人の協力も必要（知ってもらう）。

【撤去・立ち退きについて】
・荷物の側にいないとガードマンに持って行かれる。寝ていても持って行かれる。放置ではないのに処分される。
・近所の人から苦情がある（「町内から出て行け」といわれる）。人数が増えると苦情も多くなる。

【襲撃について】
・最近放火による襲撃が多い。ただの段ボールに火をつける場合もあるが、先日高校生くらいの若者に、寝ているところを放火された。ライターの燃料を段ボールに垂らして、その上で火をつけた。
・去年の暮れ、寝ていた人が油をまいて火をつけられ、火傷を負い入院した。2月頃退院したので更生に行き、入所しようとしたところ、「もう退院したからおまえは関係ない」というて追い出された。まだ通院の必要がある状態だったので、野宿をそのまましていると傷口が膿んで、今もまだ治っていない。
・襲撃を受けたり、何らかのトラブルがあって警察に相談に行くが、全く相手にしてもらえない。先日も寝ていた人が酔っぱらいに瓶で殴られているところを目撃した。頭にケガをして、そのまま近くの交番へ行ったが、「酔っぱらいのけんかだ」といって放って置かれた。

【食事に関する事柄】
・コンビニなどの弁当を取りに行くと、たばこの灰などが入っている。

【仕事について】
・高齢者や体の不自由な人は就職できない。
・仕事があると気持ちも落ち着くのに。
・住所がほしい。働いた年数に応じて年金がほしい。

【居場所について】
・あおかん（野宿）にはなわばりがあり、寝るところがなくて苦労する。
・雨がひどいとき困る。
・山の中なら人もいないけれど不便なので、やはり町に集まる。
・1日ある程度決まったお金が入れば自分の計画ができる。1日何千円単位でも良い。
・自分自身もこの生活から抜け出そうとしないといけない。病気の時など人に頼むしかないが。一般の人は知らないので相手にもしてくれない。

[写真（8月の仲間の集い）あり　省略]

「6.13西宮事件」　問題を残したまま控訴棄却

「6.13西宮事件」を考える会　森山　一弘

　西宮事件裁判の被告Tさんは、昨年10月27日の神戸地裁の判決（懲役10年）を不服として、大阪高裁へ控訴していた。控訴理由は、地裁判決の1．「殺意」認定についての事実誤認と2．量刑過重で、1．はあくまでも殺害する意志がなかったということ、2．はTさんの少年たちへの反撃には執拗に繰り返された野宿者への襲撃という要因があったことや被害者のS君もこの襲撃に加担していた可能があること、またS君以外の少年たちがもっと早くS君のことを警察に知らせていればS君は助かったかも知れないことやTさんからS君の遺族への慰謝があったことなどでそれらを考慮すると量刑が不当に重いのではないかということである。
　高裁での公判は4回開廷され、2回目の公判では地裁で証言していない別の少年2人の弁護側の尋問も行われ、Tさんを襲撃した時の様子が改めて問題にされた。しかし、6月16日大阪高裁は、第1審の地裁判決を支持し、「繰り返しの襲撃が被告人の人間としての尊厳を著しく傷つける行為」であることは認めるけれども「被告人の反撃の行為はあまりにも過剰」として、Tさんの控訴を棄却した。すなわち、執拗に繰り返される野宿者襲撃に対し野宿者は一体どうすればよかったのか、されるままにされておけばよかったのか、という問題を残したまま（ふれないまま）結審した結果になった。
　Tさんは上告し、この9月はじめに上告趣意書が最高裁判所に提出される。

こらむ

第17会全国地域・寄せ場交流会

もう2ヶ月も前の話になりますが、7月1・2日に名古屋で行われた交流会に神戸から8名で行って来ました。この交流会は毎年、各地域が担当をして行われており今年は名古屋が担当でした。今回の交流会のテーマは「激増する野宿生活者と私たち」となっていました。今回の交流会で「発題三地域の若者」として、神戸の地域から発題者として行きましたが、私が行くと若者でなくて馬鹿者になるんとちゃうんかなぁ～と思いながらも神戸で抱えている問題と言うか今現実になってきていると思うことを2・3発表してきました。一つは、前回の「にゅうすれた－11号」に載せてあった更生援護相談所の問題。二つは、野宿生活者が以前なら若くても40代後半以降だったのに、今は20代の人が増えている、そして交流会のテーマにもあるように年々増加していく傾向である。それに対して、支援をする方はどんどん高齢化が進み、参加者も減少し、様々な問題が起こっているがそれらに対応できなくなって来ている。三つは、震災によって職を失い現在公営住宅で生活をしている人達が貯金等を使い果たした結果、野宿生活へ追い込まれる可能性があるということ。

他の地域の発題は、名古屋からは、保護行政の問題点「退院と同時に保護が廃止され、野宿に戻ってしまう」。北九州からは、活動に関しての報告が行われました。その後は、分科会に分かれて様々な話がされ、夜遅くまで各地の人たちとの交流会が行われました。神戸の参加者にとってはなかなか有意義な交流ができたと思います。かなり端折って交流会の報告をしました。　森安　健氏（ヤスベ～ぇ）

被災地の集い

兵庫県被災者連絡会の呼びかけで、8月20日（日）神戸市役所前にて「被災地の集い」が三田太鼓の勇壮な響きとともに開かれました。あいにく曇り空で、途中雨が降ったりしましたが、たくさんの人が来たり、通行中の人が立ち寄ったりして賑わいました。多くの支援者グループによる屋台や、音楽、最後に挨拶・アピールなどがありました。震災後5年半を迎えた今、被災者の生活再建の困難さはますます深刻化してきているにもかかわらず、この被災地神戸の中でさえ、過去のものとして切り棄てられようとしています。自然災害で始まった災害の被害をこれ以上広げないためには、人間の手による今まで以上の支援が必要であると思えてなりません。　　事務局

お知らせ　1

前号でもご案内したように、神戸の冬を支える会を構成する団体では、日常の活動に参加して下さるボランティアを募っています。

夜まわり・炊き出し・病院訪問・役所への同行・そのほか様々な活動が行われています。

是非一度ご参加下さい。

年齢不問・性別不問・委細面談？

詳細は、神戸の冬を支える会事務局まで

お知らせ　2

　今年も昨年に引き続き、秋の全国行動が予定されています。10月21日～23日までの3日間の間、東京で集会・デモなどの行動です。昨年のそれは600人の規模でのものとなりましたが、今年は昨年を上まわる規模での行動を予定しています。神戸からも野宿している仲間が参加できるようにと、車1台で出かけることになっています。本来なら、参加を希望する仲間全員と共に全国行動に参加したいところなのですが、現在の力量から、5名という定員を設けざるを得ません。しかし、今回の全国行動への参加を通して、全国の野宿の仲間や支援の仲間たちとの連帯が生まれ出るきっかけとなることを確信しています。

会計から

　神戸の冬を支える会の運営は多くの方々からの寄付で賄われております。今年1月末から始めた尼崎での炊き出しも、暑い夏を越え、もうしばらく継続する必要があります。まことに心苦しい限りではありますが、皆様方からのご寄付をお願いいたします。

（第6期神戸の冬を支える会　会計担当）

　今年の6月15日～9月15日までの聞にご寄付をいただきました、皆様方のお名前を紹介させていただき、感謝の意を表したいと思います（敬称略）。
大田健嗣・美智子／大山治郎／松尾義雄／中田作成／聖クララ会修道院／六甲カトリック教会手作りコーナー／山本保・暎子／青山純代／愛徳カルメル会本部修道会／長瀬三千子／横山真樹子／向井金蔵／半田勝／森定弘次／竹内潤子／村田正雄／二人三脚の会／庄谷怜子／鈴木肇／竹内昌代／梅田知子／栗栖幸江／渡辺宏子／岡田幸／古川雅基／久保憲一／日本基督教団神戸北教会／宮田久美子／高山忠士／ショファイュの幼きイエズス修道会神戸修道院／本多恵子／井上暉彦／酒井桃子／山根なみ子／丸茂啓／鎌田多美子／アンチラ・ドミニ／鹿嶋節子／永田暁子／カリタス大阪／日本基督教団芦屋浜教会婦人部／田中満里／徳大寺千穂／筒井ベルナール／奥野順子／朝井邦子／中村順之輔・君子／田中文枝／管良介／日本基督教団兵庫教区お米支援委員会／道清文義／カトリック姫路教会野菜販売グループ喜安三千子／清水郁子／カトリック園田教会福祉委員会／武川忠夫／小西徳子／

郵便振替口座　01140-5-75854
「神戸の冬を支える会」

編集後記

●「社会が弱者を作っている。ボクはここでこれからどうするのかな」。初めて夜まわりに参加したある高校生が、翌日こんな感想をメールで送ってきた。本当に弱者は「作られている」と思う。例えばメール、私も気軽に使うけれど、実はこれにタッチできる条件を持つ人と持たない人とが分かれている。こういった条件次第で「出来る人」と「出来ない人」との差を生み出す社会の構造

が、まさに野宿の問題を引き起こしている。今夏、襲撃や立ち退き要請が頻発した。野宿する以外どうしようも出来なかった人を次は一体どこへ追いやるというのか。「当事者の声をもっと聞きたいな」、仲間の声を見直しながらこんな返事が思い浮かんだ。（のん）
●9月も半ばを過ぎましたが、朝晩は涼しくなってきたものの、まだ暑い日が続きます。今期から事務局のスタッフになって、今までは「にゅうすれたー」の読者だったのですがつくる側になってみるとページメーカーなど知らないことがたくさんあり、人生の勉強をさせていただいています。ははは。これから秋から冬へと変わりゆく中（年中厳しい季節は変わりませんが）、引き続きご支援・ご協力お願いします。（なお）
●夏が終わっていったばかりなのに、すでに年末年始のことを考えなければ。神戸や尼崎の仲間だけでなく、全国の仲間たちと共に、奪われてきた権利を取り戻すために、必要なことは想像力と人のつながりだ。野宿を強いられている仲間たちだけでなく、被災しながらも何とか日々の生活をおくってきている被災者の人たちとも。この神戸からこの国のありかたを問うて行こう。（Shige）

(c)2000神戸の冬を支える会 (デジタル化：神戸大学附属図書館)